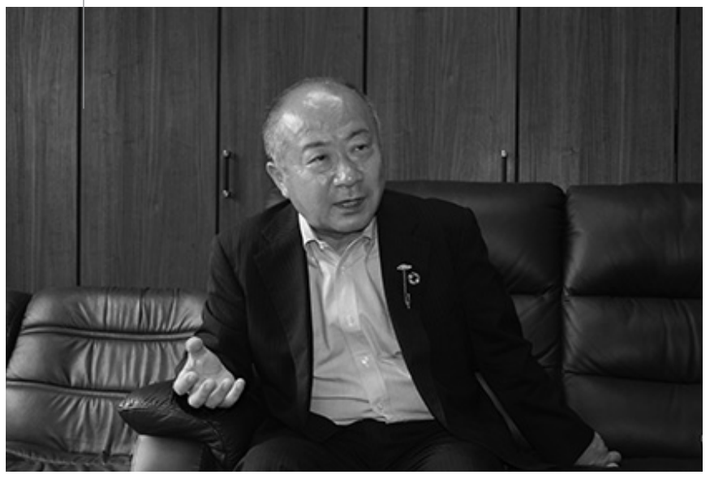
地球への思いやりで多角経営

環境事業を軸に農福連携も

株式会社石橋
代表取締役社長
石 橋 隆 二 氏



創業60周年を迎えられました。沿革を教えてください。

1961（昭和36）年に父が脱サラをして、富山で廃棄物の回収を始めました。当時は分別の意識などなく、何でも一緒くたに捨てられていた時代で、ビルメンテナンス会社から県庁などのゴミ処理を無料で引き受け、その中から古紙を分別しました。父から直接聞いていませんが、古紙は良い値段で取り引きされていたのだと思います。

同業他社がいる中で、廃棄物の分別という誰もやっていない手法で新たな事業を起こしました。その後、清掃・ビル管理も手掛け、1971年に法人化しています。

介護事業もされています。

私は1982年に入社し、青年会議所（ＪＣ）へも誘われて入会し、その人脈から取引先も広がりました。そんな中、1997年に介護事業の「とやまヒューマンサービス」を設立しました。2000年に「介護保険制度」が始まることに向け、「保険制度の大改革だ」と思い、ＪＣの先輩方にも出資してもらい、全く新しい分野に挑戦しました。自らヘルパーの資格を取り、２年間介護現場に入って、勉強しながら立ち上げました。

現在は３拠点で、約100人のスタッフを抱え、居宅・通所・訪問介護、有料老人ホームなどを開設。富山市の岩瀬・萩浦地区を担当する地域包括支援センターの運営も行っています。

－自ら実践、アイデアで勝負－

富山市が推進する「エゴマの特産化」事業でも中心的な役割を果たしておられます。

介護事業もそうですが、アイデアで勝負できる仕事がしたいと思い、指定管理事業にも挑戦しました。一時は宿泊施設など富山市の３施設を管理していましたが、施設の廃止に伴い、現在は牛岳温泉健康センターの運営を請け負っています。

温泉施設は全国どこにでもあり、観光客だけではなかなか採算が合いません。牛岳の源泉温度は60度と高く、植物工場のエネルギーにすることを考えました。2013年に廣貫堂、バイホロン、久郷一樹園との４社で「健菜堂」を設立し、富山市が特産化に取り組もうとしていたシソ科の植物「エゴマ」の栽培に着手しました。

エゴマ事業は、原材料を確保するためネパール奥地の山村と提携し、有機農法で栽培してもらい、30㌧のエゴマの実を健菜堂で買い取っています。有機ＪＡＳの認証を取り、エゴマオイルなどの販売を拡大し、ネパール現地の地域振興にも役立っています。

また、大沢野地区の耕作放棄地16㌶でもエゴマの大規模な露地栽培をしています。この圃場では無人トラクターやリモートセンシングなどＩｏＴを導入したスマート農業を実践しており、近くエゴマ以外の野菜も生産し、富山県の野菜の生産拡大の取り組みにも挑戦しようと考えています。

この健菜堂の事業を拡大するにあたり、就労継続支援Ａ型の事業所「新草会」を2015年に開設しました。牛岳の植物工場はほとんど障害者のスタッフが運営しています。Ａ型は障害者と雇用契約をきちんと結び、最低賃金以上の報酬を支払う支援形態です。障害者の人達には真面目でコツコツやる人がたくさんいます。時間あたりの生産性を求めない農業分野では有能な働き手です。

地域の産業、雇用の創出にもなっている農福連携ですね。

今でこそ経営基盤も安定してきましたが、もともと資本があった訳ではないので、アイデアで挑戦してきました。北陸電力さんには機密文書のリサイクルの仕組みを提案し、今ではそれが１つの会社になっています。

最近では清掃のプロが毎月１回トイレを掃除しながらお客様にも掃除方法を教える「トイレの神様」というサービスを始め、社員教育としても好評を頂いています。

他にも消臭効果のある除菌剤や、野菜が美味しくなる有機肥料なども大学や他社と共同で開発してきました。肥料は、廃棄物の鶏糞を活用したもので、栽培した野菜の収量や美味しさが増す結果が得られています。

－物心両面の幸せめざす－

色々な挑戦の成功の秘訣は？

私が入社した頃は両親と社員が１人の小さな会社で、自分が頑張らないといけないとがむしゃらに働きました。ＪＣの人脈にも助けられて会社も少しずつ大きくなり、売上高も１億円に届きましたが、経営が傾きかけたときがありました。社員には「俺の言うことを聞け」というワンマンな態度で、今ならパワハラと言われるかもしれません。

その頃から稲盛和夫さんの盛和塾に入って「従業員の物心両面の幸せを追求しなさい」と教えられました。飴久晴さんの経営塾でも「あなたの社員はかわいそうだ」と言われたのが胸に刺さりました。

経営塾で色々学んで、経営状態が改善してくると、外部から良い人材も入社してくれるようになりました。新しいことは、まずは自分が現場に入ってやってみて、うまくいったら人に任せるようにしてきました。

働きがいのある会社に育ててこられたのですね。

役員による「経営会議」がありますが、数年前から私は出席していません。そこで決議されたことに私は反対しません。昔は私１人で物事を決めていましたが、多少の失敗をしてもいいから、人を育てないといけないと考えています。

どうしても社長の了承を得ないといけない時だけ、社長会議を開きますが、そうすると「社長会議を開きたい」と言ってくる。「社長を呼ぶ前にもっと考えろ」と言っています。

今後の考えをお聞かせください。

私は65歳で社長を退任し、70歳で役員定年すると公言しています。いま取り組んでいる農業を、地域のためにも基幹産業となるよう軌道に乗せて、人に任せられるようになったら、その後は障害者の子たちと非効率な生活を送ろうかと、楽しみにしています。

略　歴

1961（昭和36）年12月、富山市生まれ。富山商業高校卒。1980年甲府ビルサービス入社、1982年㈱石橋入社。1987年取締役、2001（平成13）年から代表取締役社長。

盛和塾のパネルがかかる社長室で

会社概要

株式会社石橋

創　　業：1961（昭和36）年
設　　立：1971（昭和46）年9月
所 在 地：富山市草島15-14
資 本 金：1,000万円
事業内容：一般産業廃棄物収集運搬処理、医療廃棄物処理、建物総合管理、建物衛生管理・施工、環境測定、環境改善資材製造販売、防犯カメラ設計・設置、指定管理業務など
従業員数：151名（2021年7月現在）
売 上 高：7億1,800万円（2021年4月期、グループ17億円）
事 業 所：金沢支店
関連会社　㈱とやまヒューマンサービス、㈱アースクリエーション、㈱健菜堂、㈲利他、ハートフル協同組合、（一社）新草会
ＵＲＬ：http://www.ishibashi.ne.jp